

「野球がでる」甲子園で涙

神戸・北野町の友人宅に泊まっていた中国古箏演奏家の伍芳(三)は、西宮市甲子園口三、姉の丸紅社員、伍鳴(三)が心配になった。余震におびえながら、何度も電話。つながらない。

「お姉ちゃん、きつと大丈夫だわ」。だが、テレビに西宮の惨状が映った。居ても立ってもいられず、友人の車で東約十六キロの自宅に向かった。

姉妹は、上海生まれ。伍鳴は外国語専門学校を卒業後、日本に渡り、京都大経済学部に入った。経済番組「てれびOS AKA総研」のリポーターを務め、九二年四月に丸紅に入社。九歳から古箏を習う伍芳。音楽専門学校を出て、二十一弦の古箏の魅力を広めようと、九一年十月から演奏活動を始めた。

三年前から一緒に生活。伍鳴は商社員のかたわら、演奏会の会場を押さえたり、ファンレターの返事を書いたりとマネジャー役を務めた。

昨年十月には初のCD「響」も出した。「お姉ちゃんは、父親であり、母親でもある」。伍芳の口癖だった。

車から何度も電話しているうち、混線した電話口で「もしもし」と言う女性の声が一瞬間こえた。「お姉ちゃん。きつと、大丈夫なんだ」。自分に言い聞かせた。だが、木造二階建ての自宅は寝室のある二階部分が壊滅。「ジェージェー」(お姉さ

ん)。声を張り上げた。がれきの間から白い足が見えた。

伍鳴の家から北三・八キロにある日本

高校野球連盟事務局長の田名部和裕(四七)の自宅。田名部は年末から年始にかけ、高校野球の国際大会「第一回アジア・ジュニア野球選手権」で豪州に出張し、時差だけが残っていた。朝だと起きたら、まだ暗い。途端にタンスが倒れてきた。

自宅周辺は民家が軒並み倒壊。気になったのは、高野連会長の牧野直隆(八四)の安否と甲子園球場の様子だ。近所の人にミニバイクを借りた。車で二十分の神戸市東灘区深江南町の会長宅に、一時間三十分もかかった。

牧野会長は元気で、春の高校野球を心配していた。問題は甲子園の状態だ。六キロ東の球場へ。高さ三十五メートルの六基のナイター照明塔、コンクリートを覆うツタ。通用門からグラウンドへ。マウンドに立ちこわごわ、スタンドを見渡した。

内野席を覆う大銀傘、スコアボード、アルプススタンド……。見慣れた風景があった。あの激震をどうかわしたのか。マウンドはこんもりと盛り上がりついていた。「いつか野球が出来る」。涙が出た。佐伯達夫前会長(故人)は玉音放送を聞いた時、「やっとみんなで野球が出来

る」と思ったという。「野球が出来る」。これだけの言葉に、青春の汗が、人生の切なさ、甘さが伝わる。魔虚の街に希望を見いだせる。

芦屋市精道町八、元阪神タイガースのエースでリージェント・ファークリースト社長の村山実(五)は、量販店にスポーツ用品を納入するため、六時三十分には一階事務所で仕事を始める。「そろそろ起きないかん」。地震が来た。

ビルのひさしを突き破り、阪神高速の監視カメラが事務所に前に飛んできた。隣の二階建て民家が倒れる。生き埋めになった主人を駆けつけた社員八人とジャッキを使って助けた。すぐに手配したのは、二十日の支払い。銀行とのオンラインは停電で動かず、経



柏井ビル

1973年6月完成、鉄筋9階建て。フラワーロードをふさいだ(神戸市中央区、1月18日撮影)

理担当者銀行に走らせた。約四十の取引先には、支払いを待っている所もある。十畳応接間に飾っていたMVP(六二年)、最多勝(六五、六六年)、沢村賞(五九、六五、六六年)のトロフィーが破損していた。なぜか惜しくなく、あつさり捨てることにした。「これからだ。過去はいい」。心の中でつぶやいていた。